

【会員通信】

愛媛県来村川河口域で2008年夏に発生した青潮による魚類とカニ類への影響

水野晃秀

著者は、愛媛県宇和島市を流れる来村川水系において、魚類やカニ類の分布調査(水野, 1998, 2000; 水野ほか, 1999; 山本ほか, 2007)を実施するかたわら、愛媛自然科学教室における観察会にも参加するなど(水野, 2001a,b; 高田ほか, 2004; 水野・水産研究部水産増殖研究班, 2006), 流域の自然史に関する様々な活動をおこなっている。

2008年8月7日の朝、来村川河口域において青潮が発生しているのを確認し、同時に1m²あたりおよそ200尾の魚類が表層を衰弱して浮遊しているところや、多数のカニ類が岸壁に這い上がっているところを観察した(図1, 2)。観察時の表層水温は26.3°C、溶存酸素は0.67mg/l、底層水温は25.6°C、溶存酸素は1.46mg/lであった(測定地点の水深155cm)。

愛媛県農林水産研究所水産研究センター(水産研究センターホームページ: <http://www6.ocn.ne.jp/~aisuishi/m3/red/present/0808.pdf> [平成20年の月別赤潮発生状況総括図])によると、2008年6月29日から8月29日にかけて、法華津湾や宇和島湾において渦鞭毛藻類のゴニオラックス・ポリグラムが赤潮を形成していたことから、おもにこのプランクトンの死亡により無酸素水塊が形成され、様々な生物に酸欠症状を引き起こしたものと考えられた。ここでは、青潮の発生を確認した当日に現地で確認、採集された魚類およびカニ類について記録しておく。なお、今回得られた魚類およびカニ類には、本水系から新たに記録された種類が含まれており、その詳細は別途報告する予定である。

稿を終えるにあたり、採集にご協力頂いた愛媛県立宇和島水産高等学校講師の木熊慶吾氏に感謝申し上げる。



図1 来村川河口で浮遊している魚類
(多く写っているのはサツキハゼ)



図2 岸壁に上陸しているカニ類
(多く写っているのはイソガニ)

記録

観察日時 2008年8月7日 9:05 - 11:10

観察地点 愛媛県宇和島市明倫町 来村川河口右岸側(環境庁標準メッシュコード: 4932-6554)

観察、採集された魚類およびカニ類 (アスタリスクは来村川水系で初記録であることを示す。“目”は目視確認のみの種)

魚類: ウナギ(目), ガンテンイショウジ, イダテンギンボ, トサカギンボ*, マハゼ(目), ウロ

ハゼ(目), スジハゼ, ニクハゼ*, タネハゼ, クロコハゼ*, サツキハゼ.

カニ類: アミメノコギリガザミ*, イソガニ, ケフサイソガニ, ヒライソガニ, モクズガニ(目).

備考 観察範囲を一見したところ, 衰弱, 浮遊していた魚種ではサツキハゼ, クロコハゼ, タネハゼなどがよく見られた. また, 岸壁へ這い上がっていたカニ類では, イソガニが多く見られた. なお, 確認魚種のうち, ガンテンイショウジ, マハゼ, タネハゼについては, 1998年8月にも同様のプランクトンの発生にともなう衰弱遊泳, 死亡が確認されている(水野, 2000).

引用文献

- 水野晃秀. 1998. 来村川水系より得られたまだら模様のウナギ. 南予生物, 10: 17-18.
水野晃秀. 2000. 愛媛県来村川水系の魚類相Ⅱ. 南予生物, 11: 33-43.
水野晃秀. 2001a. 来村川(保手川)の魚類. 愛媛の自然, (43) 10: 7-10.

水野晃秀. 2001b. 来村川(保手川)の魚類(続)－シロウオについて－. 愛媛の自然, (43) 12: 7-9.

水野晃秀・水産研究部水産増殖研究班. 2006. シロウオについて. 愛媛の自然, (47) 11: 3-4.

水野晃秀・清水孝昭・山本孝雄・戸田隆太. 1999. 愛媛県来村川水系の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (9): 1-38.

高田信之・水野晃秀・佐々木淳夫. 2004. 来村川のシロウオ漁と野鳥観察. 愛媛の自然, (45) 11: 3-4.

山本藍子・水野晃秀・町田吉彦. 2007. 愛媛県南部におけるタイワンヒライソモドキとヒメヒライソモドキの分布(カニ下目モクズガニ科). 四国自然史科学研究 (4): 18-21.

(南予生物 15: 58-59, 2009年1月13日受付)

連絡先 水野晃秀(〒798-0068 宇和島市明倫町1-2-20 愛媛県立宇和島水産高等学校 e-mail: mizuno-kouki@esnet.ed.jp)